

女性医療宣教師 Sara Craig Buckley の 京都看病婦学校・同志社病院における活動

三 木 恵里子

はじめに

明治期の日本には、数は少ないながらも、医療に関する専門的活動を志して来日した女性宣教師が存在した。彼女たちの意識と行動は、明治期の日本女性が医療を学び、医療職を目指すという歴史的な流れに一石を投じる意味を持った。本稿は、そのうちの一人、バックリー（Sara Craig Buckley、1858-1942）について、彼女の日本での活動を中心に紹介する。

バックリーが活動拠点としたのは、新島襄がアメリカン・ボード（American Board）医療宣教師のベリー（John Cutting Berry）¹⁾を招き、同志社に医学部を設けることを構想した結果つくった京都看病婦学校とその実習機関である同志社病院（以下、看病婦学校・病院）である。病院長にはベリー、看病婦学校校長にはリチャーズ（Linda Richards）²⁾が就任していた。バックリーはここに、創設期から、医師・教員として所属した。

京都看病婦学校は、京都帝国大学附属病院初代看護婦長となった北里ユウなど、日本の看護界先駆者を輩出し、女性が医療専門家として教育を受け、活動する礎を築いた。看病婦学校・病院についての先行研究は多く、ベリーとリチャーズもそこで頻繁に取り上げられている。しかし、それらにおいてバックリーは単独で対象とされることはなく、長門谷洋治や藤本大士の医療宣教師研究³⁾の中で一例とされるに過ぎなかった。また、京都看病婦学校は女性医療専門家が女性医療専門家を育てるという意味でも先駆的な教育機関であったが、従来の女性の医療教育についての研究は、総体として、医師・看護婦・産婆・薬剤師など分野別になされており、看護学校で教えた女性医



写真1 1884年ミシガン大学卒業年のもの 写真2 1934年卒業50年後のもの
([portraits of Sara Craig Buckley in 1884 and 1934], Scrapbook, Box 1, Sara Craig Buckley Papers, Bentley Historical Library, University of Michigan)

師という存在は扱われてこなかった。また、日本の女性医師についての先行研究も、現在の東京女子医科大学を創設した吉岡彌生などの個人研究が多く、日本人による日本人のためのものの範囲に留まっていた⁴⁾。

本稿では、バックリーの母校であるミシガン大学アン・アーバー校 (University of Michigan, Ann Arbor) の Bentley Historical Library 所蔵史料と、バックリーがアメリカン・ボード本部のクラーク (Nathaniel George Clark) に送った報告書簡を主に用いる。

前者は、バックリーに関する記録等を集めた *Sara Craig Buckley papers* (以下、スクラップブック) である⁵⁾。スクラップブックには、バックリーの肖像写真も収められている (写真1、2)。

後者は、*Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions: UNIT3* (Research Publications, 1983) に収められる22通である。この22通を整理した表を添付する (表1)。発信される頻度は高くなく、不定期である。受け取りは、発信の約1か月後である。すべて手書きで、丁寧な筆記体で書かれていることがほとんどである。

表 1 バックリー書簡 22 通について

	リール	通し番号	差出年	差出日	発信地	受取日	便箋枚数
1	337	259	1887	3/不明	京都	4/13	6 枚
2		260		6/2	横浜	6/28	7 枚
3		261		8/19	比叡山	9/19	3 枚
4		262		10/22	京都	11/25	4 枚
5		263	1888	1/24	京都	2/24	4 枚
6		264		5/7	京都	6/4	3 枚
7		265		9/5	京都	10/8	3 枚
8		266		11/11	京都	12/10	4 枚
9		267	1889	1/22	京都	2/20	2 枚
10		268		2/27	京都	3/26	3 枚
11		269		5/25	京都	6/19	2 枚
12		270		6/20	京都	不明	2 枚
13	350	301	1890	1/23	京都	2/18	1 枚
14		302		1/24	京都	2/18	4 枚
15		303		2/3	京都	3/1	2 枚
16		304*1		4/9	デトロイト	不明	1 枚
17		305		7/23	函館	8/16	7 枚
18		306	1891	2/22	京都	3/21	5 枚
19		307		7/1	京都	7/23	5 枚
20		308		7/13	神戸	8/5	3 枚
21		309		10/15	京都	11/10	4 枚
22		310*2	1892	5/17	京都	6/8	17 枚？

Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions: UNIT3 (Research Publications, 1983) より作成。

リール 337: Vol.8. Japan Mission, 1880-1889

リール 350: Vol.16. Japan Mission, 1890-1899

原本は、Houghton Library, Harvard University 所蔵。

*1: ミシガン州デトロイト Woman's Hospital and Foundling's Home の Resident Physician, C. B. Talbot からのバックリー照会状のコピー。

*2: マイクロフィルムには、1 枚目と 12～17 の通し番号がつけられた便箋、計 7 枚が映っている。

そのほか、*Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions* 内のベリーヤリチャーズ⁶⁾など他の医療宣教師の書簡や、看病婦学校・病院の年報、京都看病婦学校・佐伯理一郎『京都看病婦学校五十年史』⁷⁾（以下、『五十年史』）なども参照する。

なお、年はすべて西暦のみで表記する。また、宣教師の名前のカタカナ表記は『同志社百年史』に従う。“nurse”の訳語は、京都看病婦学校にちなみ、「看病婦」とする。固有名詞のほかは、すべて新字体で表記する。英文史料の記述引用の際は、三木が日本語に訳したものを載せる。

I. 誕生から来日まで

バックリーは、1858年4月15日、アメリカ合衆国のニューヨーク州チャーチビルで生まれた。

父親は James William Craig (1822-1891) という医師、母親は Sara Sherwin Butterfield Craig (1828-1885) というピューリタンの子孫である。姉の Anna (1856-1922)、妹のマリオン (Marion、1863-1943) がおり、三姉妹全員が医師となった。他に早世した Aggie (1855-1856) と Gertie (1860-1862) がいた。

バックリーは師範学校 (Geneseo State Normal School) を経て、地元の学校 (Union School) で教師として3年間勤める⁸⁾。そして、1881年、マリオンとともにミシガン大学アン・アーバー校医学部 (Department of Medicine and Surgery, Doctor of Medicine) に入学する。この年までは、女子学生は医学部に入学できたものの、男子学生とは別に扱われ、解剖の様子などは遠くから見ることでしかできなかった。二人が入学した1881年は、医学部が共学化し、男子学生と女子学生がともに学ぶようになった最初の年であった⁹⁾。同学年に18名の女子学生がおり、そのうち16名が卒業したという。二人が卒業した1884年の卒業候補者名簿には、医学部学生は85名いるため、1学年のうち2割弱を女性が占めたことがわかる。なお、この名簿には他学部の学生の名前も載せられているが、たとえば法学部 (Department of Law) は14名、薬学校 (School of Pharmacy) は37名であり、卒業候補者全体が201

名であることから、医学部学生の人数が他学部に比べて非常に多かったことが読み取れる。

バックリーは卒業後、デトロイトの Woman's Hospital and Foundlings' Home で1年間、研修医・レジデント医として勤務し、難産や異常分娩の症例を多く扱いながら¹⁰⁾、母乳について研究をした¹¹⁾。

その後、1885年から1年間、イギリスなどヨーロッパで学ぶ¹²⁾。その留学中の6月、英国バーミンガム生まれで、同じミシガン大学の卒業生のエドモンド・バックリー (Edmund Buckley, 1856-1934、以下、エドモンド) と結婚した。エドモンドも文学士 (Master of Arts) の学位を取得したのち、ドイツやイギリスなどで学んでいた。

エドモンドは、追悼の際に「氏が同志社に來られたのは、新島先生が第二回洋行の際ミシガン大学に於て氏に会ひ渡日を慫慂せられたにより」と書かれたように、新島襄から直接、來日を請われていた¹³⁾。また、その後も新島はクラークへの1886年4月6日・6月28日の書簡で、神学を教えられる者としてエドモンドの派遣を依頼している¹⁴⁾。委細は不明だが、新島はエドモンドに大きく期待を寄せていたようである。

バックリーは、アメリカン・ボードと関係があったシカゴ婦人伝道局を仲立ちとしてアメリカン・ボードの宣教師となり、エドモンドとともに來日することになった。

1886年、すでにベリーは同志社の校医を務める傍ら、学外での治療も行っていた。リチャーズもこの年の1月に來日し、タルカット (Eriza Talcott)¹⁵⁾に帯同して日本語を学んだのち、夏頃から御所横のデイヴィス (Jerome Dean Davis)¹⁶⁾の邸宅を仮の場所として医療・教育活動を開始していた。

バックリー夫妻は、11月17日に入洛した¹⁷⁾。二人について、『朝日新聞』は「米国の哲学士バクレー氏ハ今回当地同志社英学校の教師に聘せられて來京あり又同氏の夫人は同国医学士の学位を有し殊に咽喉耳眼の諸病を治療するに得意なる由是は看病婦学校の教師とならるゝ由」と報じた (1886年12月3日大阪版朝刊「京都通信」内)。

Ⅱ. 来日後の看病婦学校・病院を拠点とした活動

エドモンドは、同志社の普通学校と神学校で、最初のドイツ語・心理学を教える教員となった¹⁸⁾。

バックリーは看病婦学校・病院で“Consulting Physician”¹⁹⁾として医療行為に携わりながら、看病婦学校の生徒たちに週3・4時間、治療方法や衛生環境など医学・看護関係のことを教えたり²⁰⁾、伝道活動を行ったりするようになった。同志社では、京都で初めて男子学生に衛生を教授した女性医師となった²¹⁾。『五十年史』は、バックリーについて、「次に創立後間もなく本校に來りて熱心に働かれしは夫のドクトル・バックレー女史なり、女史は其良人（同志社神学校教授）と共に來朝せられ同志社病院に於ては主として婦人科小児科の患者と傍ら眼科をも診せられ学校に於ては産科婦人科小児科の看護法を主として教授せられたり」と書く²²⁾。

1887年1月20日、バックリーは、大日本私立衛生会京都支会で「衛生の一斑」と題した講演を行った。前年に京都でコレラやチフスが猛威を振ったこともあり、この頃、人々の衛生への関心が高まっていた。『日出新聞』によると、この会は「北垣〔国道〕府知事の夫人を初め各貴婦人も出席あり、又此程各町づ、置たる衛生掛も残らず傍聴として出頭するといふ」というものであった（1887年1月20日）²³⁾。そして会の翌日、『日出新聞』は「昨日開會せし日本衛生京都支会へ高等女学校の吉田〔秀穀〕教長西田〔由〕監事及び女教員小川昌子以下九名が入會せしが、そは衛生の事は男女の區別なきのみならず殊に女子は經濟なり稚兒の養育なりすべて衛生に注意すべきものなれば将来女生徒へ衛生の道を訓示するためなりといふ」と報じ、女性が衛生に関心を寄せる様子を示した。この会は、1887年の例会の初回であり、会頭の祝辞や前年の会計報告もあったようだが、約500名が出席し、そのうち40名が女性だったと、京都支会は『大日本私立衛生会雑誌』第44号（1887年1月29日刊）に報告した。このときの他の論者と論題は、江坂秀三郎「小兒養育法」、香山晋次郎「一家の衛生は女子の清潔を好めるに在り」、安藤精軒「人種改良論」などであった。江坂と香山はともに京都府が

設けた最初の公的医療教育機関である療病院で学び、京都支会で頻繁に演者を務めた人物で、このとき江坂は駆黈院長を務め、香山は元療病院長の半井澄のところで開業していた。安藤精軒は、たとえば1884年の「京都医員一覧表」²⁴⁾という医師番付でも中軸のところに載るほどの高名な医師で、種痘やコレラ流行の際にも活躍し、当時、上京公立避病院心得など多くの役職も担っていた。

『大日本私立衛生会雑誌』への京都支会の報告によると、翌月2月の例会では400余名が出席したうち女性は202名、3月の例会では300余名出席したうち女性は100余名（第46号で2か月分報告、3月26日刊）、4月の例会では男性80余名に対して女性は30名（第48号、5月28日刊）であった。このあと、女性の参加者数は強調されなくなる。この前後で、例会に数百名規模が集まったと京都支会が『大日本私立衛生会雑誌』に報告したのは、1886年6月に内務省衛生局次長の石黒忠恵と安藤精軒と並ぶ知名度を持つ斎藤仙也が講演したときの例会350名（第38号、7月31日刊）、1887年11月に大日本私立衛生会幹事の後藤新平が来訪した総会450余名である（第54号、11月26日刊）。ほかは数十人規模であり、男女別に数えられていないので、女性の参加はほとんどなかったのであろうと思われる。女性の参加が急に増えるのは、バックリーが講演を行った直後である。大日本私立衛生会京都支部は、衛生への関心を高めるために女性を数多く会に参加させようとしており、バックリーは、そのために演者として招かれたと考える。

ベリーは、このバックリーの講演について、1887年4月の *The First Annual Report of the Doshisha Hospital and Training School for Nurses*²⁵⁾ で、バックリーが日本で女性として初めて“sanitary authorities”²⁶⁾から特別の招待を受けて大規模な講演会で通訳を通して講演をし、地域の新聞でも報道された、と書いた（p.8）。このベリーの報告によれば、講演以来、バックリーはリチャーズとともに“sanitary authorities”から京都での女性振興委員会（Woman's Improvement Association）の集会に招かれるようになったという。

看病婦学校・病院は1887年夏に建物を完成させ、11月15日に開業式を行った。「京都看病婦学校同志社病院同志社書籍館開業式順序」²⁷⁾には、バックリーが「バクレー氏夫人」として、「病院と看病婦学校の関係」について

話す、と載る。同志社側からの話し手の中で唯一の外国人宣教師であり、女性であった。

看病婦学校・病院の創設時のスタッフは、医師・病院長であるベリー、看病婦・看病婦学校長であるリチャーズ、医師の川勝原三と白藤信嘉、病院助手の堀俊造の五人であった。このうち白藤信嘉は、ミシガン大学医学部にバックリーと同じ1881年に入り、卒業後にエジンバラ大学医学部で生理学を学んだ人物である。帰国後の1887年12月には新島の自宅に招かれ、翌年1月には新島から家の世話を受けている。2月には新島が会合で「白藤氏ノ創設セントスル病院ヲ同志社ニ属セシムルコトヲ許スコト」と話していることから²⁸⁾、新島が期待を寄せた医師だとわかる。バックリーは、1888年11月11日付の書簡に白藤と市街地に出て治療を行ったと書き、そこで白藤をアン・アーバーにいた頃から知る日本人医師だと紹介している。

徳富蘆花『黒い眼と茶色の目』²⁹⁾では、バックリーは「女医のバアクレー夫人」として登場する。初出は、主人公・敬二が想いを寄せる壽代に再会するきっかけとなるシーンで、「叔母さんや赤ン坊を親切に見てくれる女医のバアクレー夫人に、誰やら見舞に持て来た吉野桜と碧桃の花を持て往つてくれと云ふのであつた」³⁰⁾という記述である。二度目は、敬二が勝枝という少女に好意を持っていると誤解される回想場面で、「つい先頃も女医のバアクレー夫人が来診した所に行合はせた敬二が、赤ン坊の下痢容体の通弁を頼まれ、脂汗を流して居ると」³¹⁾と書かれる。たった一節に名前が出るだけだが、徳富蘆花の印象に残っており、登場させるべきだと感じられたのであろう。日本語を話せる同志社校医のベリーに対して、バックリーは日本語は話せないけれども主人公が関わる女性たちの治療に携わっており、患者から慕われている存在として描かれている。小説の描写から、横井時雄の妻・みねの出産と死に関わったと読み取れ、その他同志社関係者の女性の治療に関わった可能性が高いと想像される。徳富蘆花のように、同志社の学生や教員たちも、バックリーの存在を認識していたのではないだろうか。

伝道活動としては、入院患者とともに祈りを捧げたり、聖書を読んだりしていたようだ³²⁾。バックリーは、リチャーズによって病院での伝道の仕事が急速に拡大していると伝えている³³⁾。また、同志社の学生が自宅で日曜日の

夕方に礼拝を守れるようにしていたようだ。

1887年10月22日の書簡で、バックリーは「病気を癒すのと同じぐらいに、霊的な仕事を望んでいます」と書き、裕福な酒商人のエピソードを伝えた。バックリーがその妻を何度か治療している酒商人が、看病婦たちとバックリーにプレゼントを贈ろうとしたが、患者間の公平を期すため個人的に受け取らないことに決めていると断り、ほかの患者の救いともなるため病院として受け取りたいと説明したところ、彼はキリスト教精神を理解し、自分たちの真の友人となった、という話である。このエピソードは1888年2月の *Life and Light for Woman* に転載された他の女性への書簡にも書かれているため、繰り返し語られるほどに、バックリーの伝道活動を表す代表的なものだといえるだろう。

バックリーは、他の女性宣教師や宣教師夫人の健康状態・治療方針について多く報告している。宣教師にとって日本、とくに京都の気候は負担が大きいうで、涼しい所への転地や帰国を勧めている。また、他宣教地区での医療状況にも気を配っていたようで、1889年5月25日の書簡では、熊本ステーションに医師を派遣できないのではないかと危ぶみ、妹・マリオンの住所をクラークに書き送っている。1889年6月20日の書簡では、中国に派遣されていた女性医師のホルブルック (Mary Anna Holbrook)³⁴⁾が京都に立ち寄った際に体調を見ることを頼まれていたようで、彼女がマラリアに罹患しており、帰国して体調が万全になるまで休養するべきだと書いている。

そのほか、宣教師が避暑と会議のために行く比叡山や神戸の舞子でのキャンプに同行し、体調管理を担っていたようだ。

バックリーは、ベリーについて「技術があり、高潔なクリスチャンである」と記している³⁵⁾。リチャーズについては、その看病婦学校・病院での献身的な働きと熱心な伝道活動を幾度も報告し、外国人からも日本人からも愛されていると書いている³⁶⁾。体調を崩すほどにリチャーズが働き詰めであることを心配し、幾度もアシスタントが必要だと書き送っている。バックリーは、リチャーズの存在が心地よい、非常にありがたい、など書いている。リチャーズも書簡でバックリーについて高く評価していることから、バックリーとリチャーズは、お互いに好感を持ちながら協力して仕事をしていたこ

とがわかる。その一方、バックリーは、書簡に、日本人医師や看病婦学校・病院の仕事に携わったほかの宣教師について書かない。

また、自分の状況や健康状態、そして妊娠・出産についても、バックリーは自分で報告しなかった。1889年8月1日、バックリーは比叡山で女兒の Dorothy を出産した。リチャーズの書簡によると、結婚を控えた看病婦二人が出産に立ち会い、二人はバックリーが自分を実験台にして勉強させてくれたこと、出産の様子を実際に観察させてくれたことに感謝したようだ³⁷⁾。エドモンドは、「バックリー夫人は順調で、今はまったく回復しており、彼女の医療の仕事に完全に復帰できる」と同年8月12日にクラークに宛てて書いている。

Ⅲ. 患者死亡をめぐるトラブルとその後

1890年冬、バックリーに大きな試練を与えた重大な事件が起きた。この事件については、拙稿「女性医療宣教師 Sara Craig Buckley の『過失』批判事件－京都看病婦学校・同志社病院の終わりの始まり－」³⁸⁾で詳述したので、以下、概要のみ記す。

1889年12月30日あるいは31日、同志社の支援者であった町医者の子玉精斎の娘であり、かつ病院の医師・白藤信嘉の結婚相手である子玉千代子³⁹⁾が死んだ。明けて1890年1月18日、同志社教員の浮田和民⁴⁰⁾の妻であり、同じく同志社教員の下村孝太郎⁴¹⁾の妹である浮田末子⁴²⁾が死んだ。二人の治療を担当していたのは、バックリーだった。

そして、1月23日、新島襄が急性腹膜炎によって、亡くなった。

その1月23日に書かれたバックリーの書簡は、いつものような便箋複数枚に丁寧に文字を綴ったものではなく、たった一枚の走り書きである。浮田夫人の病気について後便を送るので、浮田氏に返事をする前に読んでほしいというものである。翌24日に書かれた後便には、浮田がクラークに対して、バックリーを医療の仕事のために派遣したかどうかを尋ねるだろうが、自分は看病婦学校と病院での医療の仕事のために派遣され、医師として認識されていると思っている、浮田氏への返事の内容は自分の将来に関わるので

どうか慎重に質問に答えてほしい、という内容が書かれている。ここから、浮田が1月23日に、バックリーに対して、彼女が医師なのかどうかを疑い、彼女が医師として派遣されたのかどうかをクラークに尋ねる書簡を送ったと推測される。

浮田、下村、そして児玉は、アメリカン・ボード京都ステーションに宛てて、二人の患者の死はバックリーの治療上の過失によると訴えた。京都ステーションはデイヴィスを代表とする委員会を設けて調査と議論を行い、バックリーに過失はなかったと判断した。その取り調べた内容と、浮田、下村、児玉への報告書は、「児玉・浮田両家族中、死亡者の件に関する事」⁴³⁾としてまとめられている。

過失はなかったとしても、批判を受けたという理由で、バックリーは委員会から、今後しばらく施術の範囲を限定し、特に施術を請う者のみを治療すること、危篤の病状に接した時には必ずすぐに他の医師に相談すること、そして軽易な外科のみを行うこと、と告げられ、了承した⁴⁴⁾。

そのとき、新潟にいるペドレー (Pedley) という宣教師の妻の体調が悪かったため、バックリーは新潟へと向かった。再来日したホルブルックが、看病婦学校・病院のバックリーの後を引き継いだ。ベリーはホルブルックがそのまま看病婦学校・病院で働くことを希望した⁴⁵⁾が、ホルブルックは、手伝いはパスポート発行を待つ間の短期間のものと捉えており、鳥取での仕事を望んでいたため⁴⁶⁾、短期間の滞在となった。夏から、タルカットが来て看病婦学校・病院を手伝い⁴⁷⁾、Ida Victoria Smith が看病婦学校の長を務めることになった。

同じく1月23日に、リチャーズも、「今までにない試練に直面している。現に、私に対する誤解がある」「私が日本にやってきたことは大きな間違いであった」という内容の書簡を書いている⁴⁸⁾。他の宣教師や生徒とのトラブル、体調不良もあり⁴⁹⁾、リチャーズは京都を離れ、辞職・帰国した。

一人残ったベリーは、バックリーの復職を訴えるが、ペドレーの妻の死亡もあり、バックリーへの批判は強まる一方だった。また、浮田や下村、児玉や白藤の側が持つ人間関係の力は強大であった。バックリーを擁護すればするほど、批判勢力との対立構造が作られ、同志社内でのベリーの立場は悪く

なり、孤立に追い込まれた。

バックリーの書簡の発信地が京都に戻るのは1891年2月22日である。この間、エドモンドが同志社の会議に出席していた記録があるので、バックリーが単身で離洛していたことがわかる。

バックリーは、京都に戻ってからも、事件以前のように医療活動を行えなかった。女性宣教師や宣教師家族、バックリーの治療を望む患者の治療を行うことしかできなかった。この1891年2月22日書簡には、女性宣教師の病状報告が書かれているが、大阪にいる医師のテイラー (Wallace Taylor) と相談して治療の判断を行ったことが強調されているように読める。また、「リチャーズがいなくてどんなに恋しいかを伝えるのは難しいけれども、彼女が非常に回復したと聞いてとても喜んでいる」とも書いている。1891年7月1日の書簡では、「昨年、私の仕事はとても多くの落胆で始まりました。しかし、私は、その昨年のことは失敗ではなかったと感じますし、だんだん昔の患者も戻ってきて、物事は明るく見えます」と記している。

この1891年7月、佐伯理一郎が看病婦学校・病院に就任した⁵⁰⁾。佐伯は、熊本医学校を出て帝国大学で学んだのち海軍勤めを経、ペンシルバニア大学とミュンヘン大学に留学した人物である。バックリーは、そのとき同志社女学校で教えながら看病婦学校を手伝っていたデントン (Mary Florence Denton)⁵¹⁾とともに、佐伯を自宅の夕食に招き、同志社女学校卒業生の土倉小糸と結婚するよう勧めた。デントンとバックリーは、同時に病院の医師・川本恂蔵も説得して小糸の双子の姉妹である大糸と結婚させ、ダブルウェディングを成立させた⁵²⁾。

デントンは、クラーク宛1891年2月21日付の書簡で同志社女学校校長ホワイト (Florence White)⁵³⁾が強度のインフルエンザに罹患したときのバックリーの対応を称賛している⁵⁴⁾。バックリーはデントンとともにホワイトを治療し、ベリーやテイラーとも相談の上、帰国させた。デントンは、バックリーがほかの宣教師の治療・看病を行ったことも報告している⁵⁵⁾。

1892年5月17日、バックリーは17枚に及ぶ最後の書簡を書き⁵⁶⁾、自分が非常に落胆を感じていたこと、リチャーズが真実と誠実さに溢れた働き手であったこと、リチャーズが多くのことを書き送っているのを知っていた

が、状況は改善されずに心労が重なって体調不良で帰国せざるをえなくなったこと、自分は「沈黙は金」だと考えて何も書かなかったこと、などを述べている。そして、クラークが、自分の5年間の看病婦学校・病院での働きをどう感じているのかわからない、としている。

この書簡で、バックリーは、2年前に自分に対してことを起こした3人の教授が同志社の宣教師の中で問題を起こしている⁵⁷⁾、と書いた。3人とは、浮田、下村、白藤であろう。

バックリー夫妻は1892年11月に辞職し、日本を去った。同志社で行われた送別会の写真が同志社社史資料センターに所蔵されているが、数百人の人の姿が見える。ベリーによれば、出立時には、友人数百人が鉄道の駅に集まって夫妻に別れを告げたという⁵⁸⁾。

バックリーの仕事は、佐伯とデントンに引き継がれた⁵⁹⁾。その後、デントンは、女性のための医学校を作りたいと希望し、奔走したが、実現しなかった⁶⁰⁾。

IV. 辞職・離日後

バックリー一家は、アジアやヨーロッパを1年かけて周遊してから帰国した。

そして、バックリーはシカゴに在住し、医師として仕事をしながら、衛生事業や女性の活動振興のための活動を行った。

『追悼集V』に載るエドモンドの訃報には、バックリー夫妻は離婚したとあるが⁶¹⁾、詳細は不明である。

バックリーは日本で蒐集したものを、1929年にミシガン大学内に設けられた Woman's League に寄贈した (Ann Arbor University Museum from Dr. Sara Craig Buckley's collection in the Alumnae Room, League Building, Ann Arbor)。そのコレクションの中には、彫刻を施された家具や敷物などもあり、アメリカの学校の子どもたちが東洋の人々の日常生活を知るのに役立ったそうである⁶²⁾。1931年12月、ミシガン大学の博物館に、新島襄の遺品である印鑑、そしてそれとともに置いてほしいものとして新島の自伝と日本出

国時を再現した写真を寄贈している。印鑑は、長年、新島が重要な書類に署名した後、用いていたものを、1892年に新島八重から贈られたという⁶³⁾。この寄贈時の書簡には、新島と八重は自分の患者であったと書いている。

1942年11月24日、バックリーは心臓疾患のため死去した。墓は、故郷であるニューヨーク州のチャーチビルにある。

おわりに

1893年、ベリーは、ウィーンでの研修を経て帰国をしているときにポストを失い、辞職した。アメリカン・ボードと同志社は対立するようになっており、最後に残っていた宣教師の Hellen E. Fraser も、「同志社とボードのあつれきに耐えきれず」⁶⁴⁾という理由で、1896年の卒業式後に辞職・帰国した。同志社は、看病婦学校・病院を佐伯に譲り渡した⁶⁵⁾。

書簡からは、患者の死亡をめぐる事件やその後の医療行為制限など落胆するようなことがあったと読み取れるものの、のちに母校に日本でのコレクションを寄贈していることから、バックリーにとって、京都看病婦学校・病院で活動した6年間は、自分のキャリアやアイデンティティとして非常に大きな意味を持っていたといえる。

バックリー姉妹が入学した年にミシガン大学医学部が共学化したように、バックリーは医療に関心を持ち、医師になろうとする女性が多く現れていた時期を代表する人物の一人であるといえる。日本でも明治の中頃から、荻野吟子⁶⁶⁾のように開業医を目指したり、木村秀子⁶⁷⁾のように帝国大学医科大学や他の医学校で学ぶことを志したりする者が現れていた。そして、京都看病婦学校に続いて、次々と女性に看護や産婆の術を教える教育機関が作られていた。バックリーについて明らかにすることは、同志社や看病婦学校・病院だけでなく、女性が医療専門家を目指す動きの一つを明らかにすることにつながると思う。

今回は、バックリーの書簡と、そのほか宣教師が書いた書簡を中心に検討した。今後の課題として、看病婦学校など関係学校の生徒や、バックリーの治療を受けた患者がどのようにバックリーを捉えていたかを明らかにし、バ

ックリーという女性医療宣教師の存在がどのように周囲に影響を及ぼしていたのかを明らかにすることを挙げる。また、明治期の女性が医療の専門家となることを目指し、教育を求める過程、その教育環境や女性医療専門家を受け止める社会環境が成立していく過程を、男性のそれと併せて、追うつもりである。

注

- 1) 1847-1936。1872 年来日。神戸や岡山で医療活動を行い、病院設立や医学教育に携わった。
- 2) 1841-1930。ボストン市立病院婦長を経て、1886 年来日。アメリカではじめて看護の本格的な訓練を受けた人物とされる。
- 3) 長門谷洋治「近代日本における外人宣教医研究」、『日本医史学雑誌』第 16 号（日本医史学会、1970 年 4 月）、藤本大士「1880-1890 年代の日本におけるアメリカ女性医療宣教師の活動」、『日本医史学雑誌』第 64 巻第 3 号（日本医史学会、2018 年 9 月）
- 4) 渡邊洋子『近代日本の女性専門職教育－生涯教育学からみた東京女子医科大学創立者・吉岡彌生』（明石書店、2014 年）など
- 5) Bentley Historical Library, University of Michigan と藤本大士氏から提供を受けた。
- 6) マイクロフィルムのは端が切れるなどして読み取りが困難であったため、小野尚香・坂本清音「書簡からみる日本におけるリンダ・リチャーズの活動（その 1）」「同（その 2）」、『医譚』復刊第 81 号（通巻第 98 号）（日本医史学会関西支部、2004 年 10 月）に載せられた抄訳を用いる。
- 7) 京都看病婦学校同窓会編、1936 年 佐伯については後述する。
- 8) ここまで、スクラップブック内 *Michigan Alumnus* 41, No.15 (1935) : 258（以下、同窓生資料）を参照。
- 9) スクラップブック内、バックリーと妹のマリオンに対するインタビューより
- 10) Woman's Hospital and Foundlings' Home のレジデント医 C. B. Talbot からクラーク宛 1890 年 4 月 9 日付バックリー照会状より
- 11) 前掲スクラップブック内同窓生資料より
- 12) 同上
- 13) 同志社社史資料室編『追悼集 V－同志社人物誌昭和七年～昭和九年－』（同朋舎、1991 年）、p.222（以下、『追悼集 V』）
- 14) とくに後者では、“Please secure Mr. Buckley by all means” と、強くエドモンドを

- 求めている。新島襄全集編集委員会編『新島襄全集（6）英文書簡編』（同朋舎、1985年）、pp.300・304
- 15) 1836-1911。アメリカン・ボード初の独身女性宣教師として、1873年 Julia Elizabeth Duddley と来日し、現在の神戸女学院の前身を神戸に創設した。
- 16) 1838-1910。1871年来日。新島と同志社を創設。
- 17) 「十一月十七日 一 北米合衆国マサチューセッツ州ロエル府神学士アルサル、ダブリウ、スタンフォルト并同国ニューヨーク州チヨルチウィル邑住文学士エドモンド、バクレーの両氏入京す」（『同志社記録』明治19年の項、『同志社百年史 資料編一』 p.738）
- 18) 「同志社に於ける最初の独逸語教師であり且つ近世心理学を講じた最初の人であり、熱心にして頭脳明晰、所論極めて的確であった」（前掲『追悼集V』 p.222）
- 19) 前掲スクラップブック内、1889年卒業生へのアンケートでの本人回答
- 20) 前掲同窓生資料による。
- 21) 前掲同窓生資料による。ただし、リチャーズは、バックリーは衛生ではなく化学を教えていたとする（リチャーズからクラーク宛1887年3月14日付書簡、前掲小野・坂本「書簡からみる日本におけるリンダ・リチャーズの活動（その1）」 p.105）。
- 22) pp.22-23
- 23) このあと、伊藤博文の妻・梅子が始めた婦人慈善会が京都にも波及し、梅子が会長、北垣国道の妻・多年が副会長となった京都婦人慈善会が発足した。このような上流社会を中心とした女性の慈善活動文化が、看病婦学校設立の動きに力を与えていた（田中智子「京都看病婦学校開設運動の再検討－地域の支持形態に着目して－」、『キリスト教社会問題研究』第61号、（同志社大学人文科学研究所、2013年1月）、pp.30-31）。また、北垣国道は、日記である『塵海』1887年5月6日の項に「山県伯爵夫人来書、慈恵医院会員加入ノコト、直ニ返書ヲ出シ加入ノコトヲ依頼ス」と記しており、山県有朋の妻も病院支援のために尽力していたことがわかる（塵海委員会編『北垣国道日記「塵海」』（思文閣出版、2010）、p.230）。
- 24) 京都府医師会医学史編纂室編『京都の医学史 資料編』（思文閣出版、1980）、p.551
- 25) 新島遺品庫、目録番号上 0170
- 26) 大日本私立衛生会京都支会か。
- 27) 新島遺品庫、目録番号上 0151
- 28) 新島襄全集編集委員会編『新島襄全集（8）年譜編』（同朋舎出版、1992）年表よ

り

- 29) 徳富蘆花（1868-1927）が、二度目の同志社在学時（1886-1887）のことを振り返った自伝的小説。初版は 1914 年刊。ここでは、岩波新書 1939 年版を用いた。
- 30) 同上、p.102
- 31) 同上、p.103
- 32) リチャーズからクラーク宛 1888 年 1 月 23 日付書簡（前掲小野・坂本「書簡にみる日本におけるリンダ・リチャーズの活動（その 1）」pp.101-102）。リチャーズは、バックリーの伝道に対する態度を高く評価している。
- 33) バックリーからクラーク宛 1888 年 1 月 24 日付書簡
- 34) 1854-1910。マウント・ホリヨークを経てミシガン大学医学部に進学、1880 年卒業。
- 35) バックリーからクラーク宛 1887 年 3 月書簡、日付不明
- 36) バックリーからクラーク宛 1888 年 1 月 24 日書簡
- 37) リチャーズからクラーク宛 1889 年 8 月 10 日付書簡（前掲小野・坂本「書簡からみる日本におけるリンダ・リチャーズの活動（その 2）」p.83）
- 38) 『教育史フォーラム』第 17 号（教育史フォーラム・京都、2022 年 6 月）
- 39) 1871-1889。1884 年同志社女学校予備科入学、1886 年本科入学。平安教会『明治廿二年後期（十月）廿三年前期廿四年記録草本』には、1 月 2 日に葬儀を行ったと記録されている。前掲徳富蘆花『黒い眼と茶色の目』では、千代子をモデルとした矢間百代という人物が随所に登場する。デイヴィスからクラーク宛 1890 年 3 月 17 日付書簡によると、悪性腫瘍を患って 6 か月間療養しており、急変して治療を受けた 2、3 日後に亡くなった。後述する「児玉・浮田両家族中、死亡者の件に関する事」によると、その治療は 12 月 28 日である。白藤信嘉と、死亡時点では婚約中であつたのか、既に結婚していたかは不明。若王子に墓があるが、墓石には「児玉千代子墓」とのみ彫られている。
- 40) 1860-1946。同志社卒業後、牧師を経て『基督教新聞』『七一雑報』『六合雑誌』などキリスト教系出版物の仕事に携わる。1886 年 5 月に新島に招かれ同志社教員となり、西洋史、文明史、政治学などを教えた。下記下村孝太郎とともに、熊本バンドの一員である。
- 41) 1861-1937。同志社卒業後、アメリカのウースター工科大学、ジョンズ・ホプキンス大学大学院に留学。1889 年 12 月に新島に招かれて帰国し、ハリス理化学学校の創設に関わった。新島の臨終時には校長代理となり、葬儀委員に任命されたことから、帰国後間もなくにもかかわらず、この頃同志社で重要な立場にあったことがわかる。

- 42) 1867-1890。9歳の時に、兄・下村孝太郎の同志社入学に合わせて姉とともに上洛し、同志社女学校の最初の生徒となった。浮田和民「浮田末子の履歴及び志望」(『基督教新聞』1890年2月7日第341号・2月14日第342号・2月21日第343号)に3回にわたり掲載、民友社『国民之友』1890年2月13日第73号にも転載)によれば、病弱で、新島夫妻や新島の姉・みよからかわいがられていたという。健康がすぐれず1882年に熊本に帰るが、翌年に浮田と結婚し、二人の男子を産んだ。死因について、バックリーは「胃カタル及び腹膜炎」としているが、浮田とは見解が合っていない。
- 43) 「ジョン・シー・ベルリ、ウオレス・テラア」が作成者として記録されている。新島遺品庫、目録番号上 0177
- 44) 前掲「児玉・浮田両家族中死亡者の件」3丁裏・4丁表
- 45) ベリーからクラーク宛 1890年3月25日付書簡、2通の内1通目
- 46) ホルブルックからクラーク宛 1890年3月22日付・同年4月23日付書簡(佐伯裕加恵「ホルブルック書簡-印字化および註-(2)」(神戸女学院史料室『学院史料』Vol.31(神戸女学院史料室、2018年3月) pp.19-22)
- 47) 前掲佐伯『五十年史』p.27
- 48) リチャーズからクラーク宛 1890年1月23日付書簡(前掲小野・坂本「書簡からみる日本におけるリング・リチャーズの活動(その2)」p.81)
- 49) デイヴィスは、リチャーズが落馬したと述べている(クラーク宛 1890年3月17日付書簡)。バックリーは、更年期障害による体調不良や耳の病気があるとしている(バックリーからクラーク宛 1890年7月23日付書簡)。
- 50) 前掲佐伯『五十年史』p.27
- 51) 1857-1847。1888年10月来日。
- 52) 佐伯理一郎「ミス・デントンと私」(デントン記念誌編集委員会編『ミス・デントン』(同志社同窓会、1953年) pp.A 18-19) デントンは、大糸・小糸の姉である政のアメリカ留学も世話している(坂本清音監訳「アメリカン・ボード宣教師文書-同志社女学校女性宣教師を中心として-(M. F. デントン書簡-訳および註-(3))」、『Asphodel』Vol.50(同志社女子大学英語英文学会、2015年7月)。この例のように、宣教師が日本人の結婚への介入を積極的に行ったことについて、小檜山ルイが「北米出自の女性宣教師による女子教育と『ホーム』の実現」、キリスト教史学会編『近代日本のキリスト教と女子教育』(教文館、2016年)で述べている。
- 53) 1845-1931。1888年来日、同志社の予備校と女学校で教えた。女学校の教育の高等化、生徒のキリスト教教育に尽力した。

- 54) デントンからクラーク宛 1891 年 2 月 21 日付書簡（前掲坂本清音監訳「アメリカン・ボード宣教師文書－同志社女学校女性宣教師を中心として－〈M. F. デントン書簡－訳および註－〉（3）」 pp.164-166）
- 55) 熊本のクラーク宣教師の治療について、クラーク宛 1891 年 6 月 17 日書簡で報告している（同上、p.169）。
- 56) マイクロフィルムには、1 枚目と、12～17 の通し番号がつけられた 7 枚が映っており、17 と付された便箋に、書簡の終わりを示す署名がある。2～11 枚目の所在は不明。
- 57) 内容は不明。
- 58) *Life and Light for Woman* 1893 年 9 月、ベリーの看病婦学校についての報告
- 59) 「此次の年看護婦長ミス・リチャードが職を辞して帰米せられた為私が全部を引請けることになったのでミス・デントンは此外に英語をも教へらるゝことになった」（前掲佐伯「ミス・デントンと私」p.A 19）ミス・リチャードは、バックリーの誤りである。
- 60) 同上、p.A 20
- 61) 前掲『追悼集Ⅴ』p.222 エドモンドの生涯と事績についてはバックリー以上に先行研究がなく、不明な点が多いため、彼について明らかにすることは将来的課題となるであろう。
- 62) スクラップブック内、1935 年卒業生情報誌記事
- 63) スクラップブック内、バックリーから University of Michigan Museum の Carl Guthe 宛 1931 年 12 月 2 日付書簡
- 64) 『同志社百年史 通史編一』p.315
- 65) 寺崎遼「京都看病婦学校と佐伯理一郎－宗教活動の視点から」、『新島研究』第 93 号（同志社社史資料センター、2002 年 2 月）に詳しい。
- 66) 1851-1913。女性としてはじめて 1884 年に医術開業試験を受験して合格し、公許医師となる。
- 67) 1869-1887。荻野吟子と同年に医術開業試験を受験、翌年文部大臣に帝国大学医科大学入学を陳情した。